

八百万の神に問う3

秋

多崎 礼

Ray Tasaki

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 天野 英



目次

第四章	告白(四)	第三章	告白(三)	第二章	告白(二)	第一章	告白(一)	序章
134	129	100	94	45	40	19	15	10



あとがき	終章	第七章	告白(七)	第六章	告白(六)	第五章	告白(五)
246	240	231	230	204	200	161	158



人物
紹介

イロオン



エン



トウ
ロウ



登場
紹

サヨ

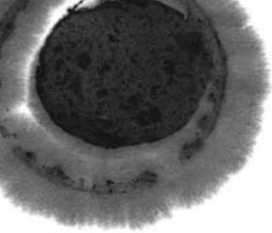


カシタミ



シヨギ





ミサキ



アンジ



サイモン



八百万の
やおよろず

神に問う3
秋

遠い昔、キアナ島には仲の良い兄弟神が住んでいた。

勇敢な兄神は金の髪と青い目を持ち、キアナ島に住むすべての獣けものを従えていた。

優しい弟神は黒い髪と緑の目を持ち、キアナ島に生えるすべての植物を従えていた。

兄神は島の民に狩りの方法を教え、犬と家畜を与えた。

弟神は島の民に農耕の方法を教え、穀物の種を与えた。

心優しい兄弟神に守られて、島の民は争うことも飢えることもなく平和に暮らしていた。

ところが、ある嵐の夜。

海を越えて、侵入者がやってきた。

侵入者達は島の民の家を焼き、逃げまどう島の民を次々に殺していった。

島の民は森へと逃れた。弟神は森を閉じ、木々の枝葉を伸ばして島の民を隠した。

だが侵入者達は森を焼き、島の民を燻いぶり出そうとした。

兄神は怒り狂った。島の民を先導し、島に住む獣達を操り、侵入者達を殺した。

それでも兄神の怒りは収まらなかった。

「もう二度とこのような真似が出来ぬよう、奴らを平らげてくれよう」

兄神は生き残った島の民を率いて、侵入者達の土地に攻め込むことを決意した。

「ともに来い、弟よ」

しかし弟神はそれを拒んだ。

「お待ち下さい兄上。彼らは幼子と同じ。今はまだ自分がしていることを理解しておりません。やがては彼らも成長するでしょう。その時が来るまで、私達は彼らに関わるべきではありません」

兄神は落胆し、なんとか弟神を説得しようとした。

けれど、弟神の決意は固かった。

「彼らの手の届かない場所に行きましょう。争いを厭う者達のため、新たな楽園を築きましょう」

「ならば我らは魂を分かち、それぞれの道を行くことにしよう」

兄神は船を築き、彼に従う島の民を連れて南に向かった。

弟神は船を築き、彼に従う島の民を連れて北に向かった。

序章



月が出ている。

黒々とした夜空に帯を成す銀河。珪砂のごとく煌めく星々。それらを背後に従え、白銀の満月が鎮座している。薄紗のような紫雲が音もなく、その顔前を横切っていく。

涼風に芒の穂がさやさやと揺れる。鈴の音に似た虫の声が聞こえる。聞こえたかと思えば途切れ、忘れた頃にまた響く。日中の暑気は薄れ、ひんやりとした夜気が心地よい。秋の気配深まる夜長月。穏やかに更けゆく望月の夜である。

へびしつ……

誰かがくしゃみをした。
屋敷の入側で巨大な毛の塊がもぞもぞと身じろぎする。

猫だ。牛ほどもある大きな猫だ。

大猫は頭を上げ、ぺろりと鼻を舐めた。体を起こし、後ろ足で顎の下をカカカと搔く。ごっそり抜けた毛が、白い塊となつてふわりと落ちる。

大猫の目が丸くなった。ふわふわと揺れ動く毛の塊が、どうにも気になるらしい。そろりと前足を伸ばし、ちよいちよい、ちよいちよいとそれを転がす。真綿のような毛塊はふわりふわりと舞い踊り、入側の縁を越え、暗い庭へと消えていく。

大猫は残念そうに首を傾げた。が、すぐに興味を失つたらしい。大きな欠伸を一つ。四肢を折って再び丸くなる。茶と焦茶と白黒が交じったキジトラの毛皮。それは一月前に比べ、心なし膨らんだように思える。

「お前、すっかり冬毛になったな」

イーオンは目を細めた。

手を伸ばし、大猫の背中をぽふぽふと叩く。

「それに、少し肥えたか？」

「ヴルルル……」

余計なお世話と言いたげに、大猫が唸る。三角の耳が神経質そうにびくびくと動く。

「おや、気にしていたのか。それはすまなかつた」

くすくすと笑いながらイーオンは体の向きを変え、大猫の腹に背を預ける。

ぶぶぶぶぶ……

大猫は不満そうに喉を鳴らしたが、イーオンは気にもかけない。傍に置いていた徳利を持ち上げ、盃に酒を注ぎ、一息に飲み干す。そのまま惚れ惚れと夜空を見上げる。

「いい月だ」

大猫はくふんと鼻を鳴らした。前足の上に顎を乗せ、金色の目を眠そうに細める。

「月見酒にはうってつけだな」

イーオンは上機嫌で徳利を傾け、おや？ と首を捻った。徳利の口をコンコンと盃にぶつける。徳利を逆さにして振る。右目を閉じ、左目で徳利の中を覗き込む。

空だ。

「おおい、クソ弟子！」

イーオンは屋内に向かつて声を張った。

「酒がないぞ！ おかわりを持ってこい！」

返事はない。

中の間の左隣にある控えの間。閉じられた襖障子の隙間からは、行灯の明かりが漏れてくる。

「聞こえないのか、クソ弟子！」

「聞こえてるよ」

襖障子が開いた。シン少年は鼻の頭に皺を寄せ、眈を吊り上げてイーオンを睨む。

「オレには『シン』っていう立派な名前があるんだよ。クソ弟子って呼ぶんじゃないよ、クソババア」

「敬愛すべき師匠をクソババ呼ばわりするヤツは、

クソ弟子で充分だ」

「それが通用するならば、可愛い弟子をクソ弟子と呼ぶ師匠だって、クソババアで充分だ」

「そういう減らず口は課題を終わらせてから言え」

面倒臭そうにイーオンは空の盃を振る。

「で、音討議書は読み終わったのか？」

「……あともう少し」

「やれやれ、一日がかりでまだ終わらないのか」

「仕方がないだろ！」

噛みつくようにシンは反論する。

「畑仕事に掃除洗濯、お前の飯の用意から酒の支度までオレ一人でやってるんだぞ。本を読んでるヒマなんて、どこにあるっていうんだよ!？」

「そういう約束だ」

悪びれもせずにイーオンは答える。

「すべてお前が望んだことだろう?」

「ううう……」シンは苛々と髪を掻きむしる。「そうだよ、その通りだよ畜生！」

そんな彼を見て、イーオンは偉そうに頷く。

「わかればそれで良い」

「クソ、今に見てるよ。いつか伝説を越える音導師になつて、お前を言い負かしてやるからな！」

「急げよ」

イーオンはふふんと鼻で笑った。

「そう長くは待つてやらんぞ?」

「お前のそういう所、ほんとムカツク」

「むかつくとは『無知』に『化け物』が『憑く』で

『無化憑』と書く」

シンを指さし、ほくそ笑む。

「お前にびつたりな音字だな」

「ぐ……」言葉に詰まり、シンは狼狽える。「む、ムカツクのはオレじゃなくて、お前の態度が——」

「嘘だ」

「え?」

「悪かった。まさか信じるとは思わなかった」

ケラケラと笑いながらイーオンは盃で膝を叩く。

「お前、ずいぶんと素直で可愛らしくなったな。うむ、師匠は嬉しいぞ？」

「こ、この野郎……」

シンの顔がみるみるうちに赤くなる。

「ふざけんな！ この飲んだくれが！」

「そう怒るな。悪かったと言っているだろうが」

「そういう問題じゃ——」ないと言いかけて、シンは押し黙った。遊ばれていることに気づいたのだ。

反論を諦め、畳の上から空の徳利を拾い上げる。

最近、ますます酒量が増えた気がする。今日はこれで五本目だ。サヨが持ってきてくれる常世ノ酒だけではとても足りない。杜氏見習いのモクに頼んで、また常世ノ酒の大樽を運んで貰わなければ。

「——つたく、飲み過ぎだつての」

ひとりごち、シンは上目遣いにイーオンを睨む。

「あともう一本だけだ。それで今日の分は終わりだからな！」

「うええ？」

「うええ、じゃねえ」

「餓鬼のくせにケチくさいことを言うな」

「黙れ、飲っぱらい」

悪態をつきながらシンは土間に向かった。暖簾の手前で足を止め、振り返る。

「あと飲んではつかいしないで飯も喰え。てか、オレの飯が喰えねえなら酒もお預けだ」

「——つて、お前は小姑か？」

「よく気がつく優秀な弟子だよ。師匠、

厭味たらしく言い返し、シンは土間へと姿を消す。

「まったく、クソ生意気なクソ弟子だ」

呟くイーオンの声音は、その言葉とは裏腹に、どこか誇らしげであった。そんな彼女の横顔を大猫がじいっと見つめている。それに気づき、イーオンは大猫を振り返った。

「……何だ？」

猫はもの言いたげに、ひくひくと鬚を動かす。

イーオンは体の向きを変え、大猫と向かい合った。

「言いたいことがあるなら言ってみろ」

大猫はゆっくりと立ち上がった。イーオンに巨体をすり寄せ、彼女の頬ほおに大きな頭を擦こすりつける。

わかっていますよ、というように。

本当は彼が可愛くて仕方がないんでしょう？

「そんなじゃない」

大猫の鼻面を撫で、その顎の下をくすぐってやりながら、イーオンは苦笑した。

「私は、あいつが羨うらやましいだけだ」

告白 (一)



ライアン・ハートといいました。

あの、すみません。
里長の紹介で来ました。

告白がしたいと言ったら、ここには教会はない、
教父もいないと言われて、どうしても話をしたければ音導師のところへ行けと言われました——

話を聞いていただけますか？ お話しする内容について、秘密を守ると約束していただけますか？

……ありがとうございます。
我が儘を言って申し訳ありません。

聞いていたきたいのは、ある男の話です。
彼の名はライアン——

ライアンが生まれたのはキアナ島。キアナ島はア
ルス大陸の北、北海に浮かぶ孤島です。フィランス
口教の聖典の元となった兄弟神の伝説が残る島で、
デイセント人には『聖地』と呼ばれている場所です。
キアナ島の領主であるハート家は、デイセント連
邦の頂点に立つ『統治者』を幾人も輩出してきた名
家です。ライアンの父アラン・ハートはデイセント
陸軍の第一師団を任される大将で、『統治者に最も
近い男』と称されていました。

そのハート家の子息となれば将来は明るい——は
ずだったのですが、実をいうとライアンは微妙な立
場になりました。

彼は、庶子だったんです。

ライアンの母親は召使い上がりで、しかもハート
家にはすでに正妻の息子、正当なる嫡子である兄
ヘンリーがいました。だからライアンはハート家の

跡継ぎには成り得ない。それでもハート家の血を引く男子であるから、ないがしろには出来ない。礼儀正しく接しはしても、誰も敬意は払わない。彼はずっと、そんな状況に置かれていたんです。

そんな自分の立場を、ライアンはよく理解していました。ですから彼は両親の反対を押し切り、故郷の島を出て、士官学校に入學したのです。

古くからデイセント連邦の主戦力として活躍してきた騎馬兵団。それをデイセント軍として組織化したのは先代の統治者です。ですので当時はまだ軍規も緩く、伝統や家名を重んじる古い風潮が残っていました。今では禁じられているようですが、たとえ士官学校を卒業していなくても、名家の子息達には高い地位が約束されていたのです。

そんな悪しき慣習をヘンリー・ハートは当然の権利だと言いました。自分はハート家の嫡男。高貴な血統を受け継ぐ特別な人間。優遇されてしかるべきだ。そう言つて憚りませんでした。ヘンリーは自分

以外の者達を軽んじ、必死に努力する者達を嘲笑し、汗水垂らして働く者達を侮蔑しました。

そんな兄を見て、ライアンは心に誓いました。

ヘンリーを嫡子の座から追い落とし、自分がハート家を継ごう——と。

胸に秘めた野望。ライアンはそれを誰にも明かしませんでした。燃えるような野心を人の好い笑顔で覆い隠し、誰にもそれを悟らせませんでした。

唯一人の例外を除いては。

彼の名は——ファルケ・ラーヴァ。

ライアンの同期生の一人でした。

ファルケはアルス大陸の南西部にあるエーデ地方の出身でした。エーデ地方は辺境です。有名士族の子息ばかりが集まる士官学校では、かなり珍しい存在といえました。ですから当初、同期生達はファルケのことを『田舎者』と揶揄しました。

が、そんな声はすぐに聞こえなくなりました。ファルケは銃を持たせれば百発百中。独特の格闘

術を駆使し、彼の二倍もある大男さえ倒してしまふ。劍技に關しても超一流で、現役軍人である教官をして「お前に教えることは何もない」と言わしめるほどの腕前を持つていたんです。

同期生達はファルケのことを遠巻きに眺めるようになりました。多分、怖かつたんでしょう。彼は無口で無愛想で、どうにも近寄りがたい氣配を纏まとっていましたから。

ファルケは他の同期生達のように、ライアンを特別扱いしたりしませんでした。お世辞も言わず、媚こびもせず、氣を遣つかつたりもしませんでした。

そんなファルケを見て、ライアンは考えました。

これほどの腕を持つ男が、ただの地方貴族であるわけがない。おそらく彼はその筋の人間だ。もしかしたらファルケは僕を監視しているのかもしれない。兄のヘンリー、もしくは他の誰かの命令を受けて、僕のことを探っているのかもしれない。だとしたら、今のうちに手を打たなければ。もし誰かに僕の野心

を悟られでもしたら、後々面倒なことになる。

とはいえ、あからさまに彼を遠ざければ、逆に疑念を抱かせてしまふかもしれません。まずはファルケの眞意を見極める必要があります。

そこでライアンは無邪氣さを装ってファルケに近づき、彼に尋ねました。

「君はなぜ士官学校に入ったんです？」

すると、ファルケは答えました。

「俺は劍だ。切れ味のいい一振りの劍だ」

自分を活かしてくれる主を捜している。

彼の言葉を聞いて、ライアンは直感しました。ファルケは命令に従うように訓練された兵士であり、自らの頭で考えることを得意としない。ならば利用価値はある。ファルケが誰に雇われているのか。父か、兄か、それとも僕を利用しようとしている他の誰かなのか。今はまだわからない。けれど僕は傀儡傀儡になるつもりはない。そう簡単に踊おどってなどやらない。裏をかき、ファルケを逆に操さって、僕の手足と

して働いて貰う。

そこでライアンは目に涙を浮かべて同情を誘い、言葉巧みに彼を引きつけ、自分の剣になるよう持ちかけました。するとファルケは、ある意外な条件を突きつけてきたのです。

「統治者になれ。統治者になって、この腐った世界を変えてくれ」

ライアンは焦りました。ファルケがなぜそのような提案をしてきたのか、ライアンにはわかりませんでした。

しかし、もう後には引けませんでした。

「わかりました」

ライアンは応え、右手を挙げて宣誓しました。

「フィランソロの唯一神にかけて、ライアン・ハートはここに誓う。僕は統治者になる。統治者になって世界を変える」

するとファルケは、ライアンと同じように右手を挙げて言いました。

「お前を統治者にするために、俺はお前の剣になる。俺達の野望の実現のために、俺を活かせ、ライアン・ハート」

あの頃のライアンは猜疑心の塊で、相手を出し抜くことばかり考えていました。少しでも優位に立つとうと、馬鹿みたいな策略を必死に巡らせていました。当時の彼は幼すぎて、自分がどんな人間なのかわかっていませんでした。自分が本当に求めているものは何なのかさえ、わかっていなかったんです。

ライアンは、寂しかっただけなんです。自分を認めて欲しい。本当の自分を理解して欲しい。彼が求めていたのは、それだけだったんです。

もっと早く、それに気づいていれば――

彼の人生は、まったく違うものになっていたかもしれせん。

第一章



青空高く、罌雲が浮かんでいる。

広い空を渡り鳥が横切っていく。澄んだ空気を縫うように、すすいと蜻蛉が飛び交う。爽やかな風が吹き抜ける釀成月。薄紅葉に山粧う季節である。

龍神湖を囲む山々は一雨ごと、一夜ごとに秋めいていく。日々薄茶色に染まっていく光景の中、土手に咲く彼岸花の赤が眩しい。ゴノ里を囲む田園は落水をすませ、豊かに実った稲穂は重そうに頭を垂れている。柿は色づき、無花果は濃紫に染まる。

実りの秋。豊穰の秋である。

龍神湖からの風が清爽な早朝。ゴノ里の大通りには朝市が立つ。その店頭を彩るのは、もちろん秋の味覚の数々だ。

つやつやと輝く茄子。みっちり太った泥つき大根。一米以上もある長芋。綿入り手袋のような自然薯。占地に滑子、椎茸に舞茸。山と積まれた松茸からはうっとりするような芳香が漂ってくる。

果物も豊富だ。初物の青蜜柑。爽やかに香る酢橘。柿に石榴に無花果。木通の茎と実。たわわに実った山葡萄。さらには鱸に鯨に落ち鮎。遡上前の銀毛鮭。珍しいところでは脂の乗った牡丹肉もある。

多くの人で賑わう朝市。所狭しと並べられた品々を丁寧に見て回る黒衣の若者がいる。

白い肌。彫りの深い顔立ち。ふわりと揺れる栗茶色の髪は光の加減で赤茶色に輝く。背はそれほど高くないが、天路人とは異なる容貌だ。それでも屋台の店番達は気軽に彼に声をかけ、青年も流暢な天路語でそれに答える。

彼の名はトウロウ。出散渡人でありながらゴノ里の防人となった凄腕の剣客である。

「あ、トウロウ。いいとこにきたね」

野菜を売る中年の女性が彼に声をかけた。

「今朝採ったばかりの葉唐辛子があるよ。甘辛煮にするあまからと美味おいしいよ」

「いいですね。ついご飯が進んでしまいいそうです」

「それより山芋はどうだい？」隣店の親父が割って入った。「とろろ月見に走り蕎麦そばとくりや、もう絶品でもんだぜ。それに今朝は、ほれ、零余子むかごも入ってるよ！」

彼はトウロウの目の前に、小さな丸い粒が入った籠かごを差し出す。

「零余子……ですか」

トウロウは零余子を指先でつまんだ。二糰りんほどの丸い粒。山芋の茎に出来る球芽である。

「これ、どんな風にして食べればいいんですか？」

「素揚げ、塩茹で、砂糖醬油さとうじょうゆに絡からめても旨うまいぜえ。

飯と一緒に炊き込んでもイケる」

「それは面白い」

にっこりと笑うと、トウロウは頷うなずいた。

「これ、一山下さい」

「毎度ッ！」

ペシリと額ひたいを叩たたき、親父が破顔する。

「トウロウってば、新しモン好きなんだから」

その隣では客を取られた野菜売りの女が口を尖とがらせている。トウロウは彼女を振り返り、その口元に品の良い笑みを浮かべた。

「葉唐辛子も一束いただきました。ミサキ音導師おんどうしの好物ですから」

ミサキ音導師とはゴノ里の専属音導師である。

穏おだやかな性格と公正な判断力を持つ彼は、里人達の信頼も厚い。さらに彼は里の子供達を屋敷に集め、読み書き算盤そろばんも教えている。誰からも慕したわれ、尊敬を集める好人物である。

トウロウは毎日ミサキの屋敷に通い、そこに集まる人々のため、朝晩の食事を用意している。とはいえ、それは義務ではない。もちろん仕事でもない。趣味だ。トウロウにとって料理の創作は何物にも勝

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。